

土左日記の文末表現をめぐる諸問題(2)

半沢幹一

本稿は「土左日記の文末表現をめぐる諸問題(1)」(『Kyoritsu Review』第四八号、二〇二〇年)の続稿かつ完結編である。

13

まだ取り上げていない文末表現は、文末語の大勢を占める助動詞と動詞である。土左日記の地の文四一六文のうち、文末語が助動詞の場合が二〇六文(四九・五%)、動詞の場合が一二二文(二九・〇%)で、一位と二位を占め、合わせて全体の約八割にも及ぶ。

前稿第2節において、動詞の裸形が文末に来ることを漢文訓読の影響とする従来の見方に対して疑義を呈しておいたが、後の女流日記における動詞文末の多さもふまえれば、それはそもそも日記というジャンルの性格に起因する、ことと考えられる。

日記は基本的に、その日その日に起きた出来事を記すものである。その記述にあたっての原則は二つある。一つは、内容は直近ではあるが記述時点からはすべて過去の出来事であること、もう一つはその出来事をそのまま描写するこ

と、である。この二つの原則がもたらすが、文末動詞に特定の付属語は下接しないということである。

一つめについては、時制に関わる助動詞であり、過去であるのは自明なので、あえてそれを表示する必要がないということである。とはいえ、文末語となる動詞それ自体が非過去という時制を表すこともありえるが、日記において時制は非関与的である。

もう一つについては、情意に関わる助詞・助動詞であり、特にそれを明示する必要がない場合には、各文における出来事があるまま動詞によって締め括られるということである。その特別な場合とは、前稿第11節に取り上げた終助詞や第12節に取り上げた形容詞・形容動詞の中の感情系の語が文末に来る場合である。情意と結び付く内面の変化を表す動詞が文末語となることもあるが、それは内面の変化をいわば客観的に示しているのであって、直接的な情意の表出ではない。

もちろん、土左日記において文末語としてもっとも多いのは助動詞であり、動詞文末を上回っているのであるから、ここに挙げた原則から外れるケースのほうが主となりそうである。しかし、それらの助動詞も詳細を見れば、原則寄りの描写表現であることが明らかである。

14

まずは、動詞の文末語の詳細をしてみる。各動詞を頻度順に示すと、以下のとおりである（カッコ内が頻度数）。

- ①あり（一七）、②言ふ（一三）、③行く（七）、④漕ぎ行く（六）、⑤見ゆ（四）、⑥祈る・追ふ・返り事す・とまる・降る（三）、⑦入る・思ほゆ・す・奉る・のぼる・喜ぶ（二）、以下、四二語が一回

この結果から指摘できるのは、次の四点である。

第一に、全体として文末動詞にとくに大きな偏りはなく、バラついているということである。複数回出てくる動詞は一六語しかなく、文末動詞における異なりの約二七%、延べの約六五%であり、最高でも「あり」の一七回である。第二に、上位を占めるのは基礎的な動詞であり、これらは土左日記独自の傾向とはいえないということである。第一位の「あり」、第二位の「言ふ」、第五位の「見ゆ」、第七位の「す」などが、それに当たる。ちなみに、上位の中で「あり」は唯一の状態性の動詞であり、同様の語は「集まり居り」の一語のみである。

第三に、船旅に関わる動詞が多く見られ、これらは土左日記独自の傾向と考えられるということである。第三位の「行く」、第四位の「漕ぎ行く」、第六位の「追ふ」、第七位の「のぼる」など、移動に関わる動詞が目立ち、第六位の「とまる」を含め、どれも船旅に関わる。さらには、一回の「出だす・出づ・移る・送りす・追ひ来・降り乗りす・門出す・漕ぎ出づ・はなむけす・行き過ぐ」も、これに加えられよう。

第四に、それほど目立ちはないが、内面に関わる動詞が少なからずあり、出来事の記述を中心とする日記としては注目されることである。第六位の「祈る」、第七位の「思ほゆ・喜ぶ」のほか、一回の動詞の中でも「怪しがる・憂へ嘆く・思ふ・聞こゆ・悲しび恋ふ・心地す・嘆く・忘る・怨ず」などがある。

15

以上の動詞文末は、各日の記述においてどのように分布しているか。

土左日記には五五日間の記述があり、記述量には二文から三六文までの幅がある。その中で、日付を除き、全文が

動詞文末という日は、次の二日（一月五日・二月一四日）しかない（該当語を□で示す）。

五日。風波やまねば、なほ同じところにあり。人々、絶えず訪ひに來。〔一月五日〕

十四日。雨降る。今日、車、京へとりにやる。〔二月一四日〕

ともに、三文のみから成り、その日の出来事の要点だけが記されている。

半数を越えるのも、五日を数えるばかりであり、以下にそれらの日の文末語の様相を示す（カッコ内は動詞文末数／総文数。また動詞文末以外には傍線を付す）。

一月二一日（四／五）…門出す・書きつく・わたる・送りす・更けぬ

一月二二日（二／三）…立つ・はなむけす・あざれあへり

一月二七日（八／一三）…廿七日・漕ぎ出づ・悲しび恋ふる・堪へず・（歌）・言ふ・ほのめく・す・言ふ・言ふ・言ふなる・泊る・追ひ来たり

一月二二日（七／一三）…廿一日・出だす・出づ・ありける・漕ぎ行く・あり・あはれなる・集まり居り・打ち寄す・言ふ・聞こへたる・咎むるなり・（会話）

一月二六日（六／九）…廿六日・漕ぎ来る・あり・奉る・詠める・喜ぶ・喜ぶ・とぞ・祈る

これらの分布にはとくに規則性は見出しがたいものの、推察されるのは、動詞文末が冒頭文あるいは各日の日付の

直後の文つまり実質的な冒頭文に現れる傾向が強く、そのこと自体に何らかの意味があるのではないかということである。

確認してみると、五五日中の二六日つまり半数近く(四七・二%)の冒頭文に動詞文末が来ている。末尾文の文末には一一例(二〇・〇%)、残り八五例が冒頭・末尾文以外の文末(二七・七%)であるから、冒頭文の動詞文末の割合が突出していることがわかる。

冒頭文の文末に来る動詞を挙げると、以下のとおりである(各動詞のカッコ内は冒頭文末数/全文末数)

あり(三/一七)、追ふ(三/三)、降る(三/三)、行く(二/七)、漕ぎ行く(一/六)、とまる(一/三)、
入る(一/二)、のぼる(一/二)、出だす・追ひ来・漕ぎ来・漕ぎ出づ・門出す・はなむけす・立つ・悩み患ふ・
ぬざる(各一/一)

これらが冒頭文の文末に来るのは、その日の最初の出来事(行動)ということではなく、船旅に関わる、その日の中心的な出来事(行動)を、トピックとして包括的に提示するためであり、だからこそ付属語を下接しない文末になっているのではないかということである。

やや異質と見られる「あり」も三例とも(一月三日・一月五日・一月八日)は「同じところにある。」であり、「降る」三例も降雨により、ともにその日は出港が見送られることを示すという点で、船旅に関わっている。逆に、文末に二三例もある「言ふ」、四例の「見ゆ」、三例の「祈る・返り事す」、二例の「思ほゆ・す・喜ぶ」が、冒頭文の文末にまったく現れないのは、それらがその日全体の中心的なトピックにはなりえなかつたからであろう。

りの描写表現である」と述べたが、このような様相はそのことを裏付けていると考えられる。

すなわち、多数を占める完了系の助動詞は動作の終局面あるいはその後の状態に焦点を当てるものであつて、その動作を描写するという点に変わりはないということ、過去系の助動詞が非常に少ないというのは、出来事を過去のものとして記述してないのであつて、それを用いるのは特別な場合であるということ、そして、判断に関わる助動詞のうち打消系と断定系は表現された出来事の事実性の有無を示すのであつて、どちらであれ事実をふまえたものであるのに対して、主観に重きを置いた推量系は少ないということである。

17

以下に、各意味系統の助動詞の様相を概観する。

まず、完了系の助動詞であるが、複数回上接する動詞をそれぞれ挙げると、以下のとおりである。「つ」は三例とも別語であるので、掲げない。

ぬ …成る(七)、止む(四)、来・更く(各二)

り …詠む(九)、言ふ(七)、とまる(五)

たり…持て来(三)、おこす・饗応す・似る(各二)

これらからは、助動詞ごとに上接動詞がほぼ固定していたことがうかがえる。各一例の動詞も含めて、複数の完了系の助動詞に接続する動詞は一語を除いて他に見当たらない。その例外が「とまる」であり、「り」の五例に対して「ぬ」

が一例ある。その全例を以下に示す。

二十九日。大湊に泊まれり。(二月二十九日)

二日。なほ大湊に泊まれり。(二月二日)

十日。今日は、この奈半にとまりぬ。(二月一日)

十四日。暁より雨降れば、同じところに泊まれり。(二月四日)

十六日。風波やまねば、なほ同じところに泊まれり。(二月六日)

一二日。山崎に泊まれり。(二月二日)

すべて日付直後の一文にあり、しかも一月二日・一月一日・二月二日の三日分の記述はそれしかない。これらが意味するのは、「とまる」という行為の完了・完遂がその日に記述すべき中心的な出来事トピックであることを示しているということである。とはいえ、このうち三番目の一月一日だけが「り」ではなく「ぬ」を下接しているのはなぜかということが問題になろう。

注意されるのは、一月一日の一文には、他とは異なり、「今日は」と「この奈半」という、ダイクティックな表現が見られる点である。前日、大湊を出港して暮れ方に奈半に到着し、おそらく天候は悪くなかったにもかかわらず、休息のためか、あえてそこにもう一日留まって夜を過ごすことになったということを示すために、完了系の中でも行動後の存続態に重点のある「り」(その文中に「なほ」や「同じところに」という表現があることも含めて)ではなく、その行動自体の局面を示す「ぬ」が用いられたと考えられる。

ちなみに、動詞文末にも「とまる」が三例（二月二七日・二月八日・二月九日）、見られる。このうち、二月八日の例は、「り」や「つ」が下接する場合と同様、日付直後の一文「八日。なほ、川上りになづみて、鶉飼の御牧と
いうところに泊まる。」にあり、以下に七文が続く。ここだけ完了系の助動詞が下接していないのは、この直後に、「今宵、船君、例の病おこりて、いたく悩む。」という動詞文末の一文が続き、「とまる」ことと「今宵」が一連のこととして意識されたからではないかと考えられる。その他の二月二七日では、末尾から二番目の文「今宵、浦戸に泊る。」に、二月九日では、末尾文「今宵、鶉飼といふところに泊まる。」に現れ、どちらもその日最後の行為となる停泊・就寝を示すものになっている。

18

次に、文末に位置する過去系の助動詞を取り上げる。

文末の「き」は、最終日の二月一六日の条に、「ほとりに松もありき。」の一例があるのみである。ここに「き」が用いられたのは、「五年六年のうちに、千歳や過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。」と続くように、今や往時の姿は見ると影もないという、時間的な隔絶を明示するためであろう。

「き」という終止形は他に二例あるが、一例は「されども「死じ子、顔よかりき」といふやうもあり。」（二月四日）という、一文中に引用された文に見られ、もう一例は「かく、上る人々の中に、京より下りし時に、みな人、子どもなかりき、到れりし国にてぞ、子生める者ども、ありあへる。」（二月九日）である。後者は「なかりき」で切れてもよさそうなのであるが、諸注は読点を付して、以下に逆接的につなげている。「上る人々の中に」と「子生める者ども、ありあへる」との意味・構文的な関係を優先したからと見られる。この一文には「き」が三回用いられていて、

どれも上京という現在時との隔絶が示されている。

「けり」は三五例、文末に現れるが、その分布には四つの特徴的な点が認められる。

第一に、文末の「けり」は五五日のうちの一八日つまり全体の三分の一の記述にしか見られないということである。これは記述量の如何とは関係なく、文末の「けり」は三文だけの日にも三六文もある日にも見られる。

第二に、文末に「けり」が見られる一八日は、門出の日の二日後の二月二三日から最終日の二月一六日まで、間を空けながらも、ほぼ全体にわたっているということである。そのうち、四日連続しているのが一回（二月四日～二月七日）、二日連続が三回（二月二五・二六日、一月二〇日・二一日、一月二九日・三〇日）ある。

第三に、一日分の記述において、文末に「けり」が出てくる回数にはバラつきがあるということである。最多の六回が一日（二月二〇日）、四回が一日（二月一六日）、三回が一日（一月九日）、二回が五日（二月二六日、一月七日、一月二九日、二月五日、二月七日）、一回が二〇日という具合である。

第四に、各日の冒頭文の文末に「けり」が来るのは、一日（一月九日）のみであり、末尾文の文末も六日（二月二五日、一月二六日、一月一六日、二月五日、二月六日、二月七日）にすぎず、残りは両者の中間部分に位置するということである。

以上から、文末での「けり」の用いられ方に関して指摘できそうなことは、次の三点である。

一つめは、文末「けり」によって各日の記述全体を時制的に統括するような、一貫した使用は認めがたいということ、二つめは、日による文末「けり」の有無あるいは多少は、それぞれの文の内容に対する書き手の位置付け方に左右されるのではないかということ、そして三つめは、その位置付け方は必ずしも「過去」という時制によるとは限らないということ、である。以下、これらについて検証してみる。

土左日記中、文末に「けり」がもつとも多く見られる一月二〇日の記事全文を以下に示す（便宜として文番号を付し、段落分けはしない）。

①二十日。②昨日のやうなれば、船出ださず。③みな人々憂え嘆く。④苦しく心もとなければ、ただ、日の経ぬる数を、今日幾日、二十日、三十日とかぞふれば、指もそこなはれぬべし。⑤いとわびし。⑥夜は寝も寝ず。⑦二十日の夜の月出でにけり。⑧山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。⑨かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂といひける人は、唐土にわたりて、帰り来ける時に、船に乗るべきところにて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしの漢詩作りなどしける。⑩飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。⑪その月は、海よりぞ出でける。⑫これを見てぞ仲麻呂のぬし、「わが国に、かかる歌をなむ、神代より神もよん給うび、今は上、中、下の人も、かうやうに、別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時にはよむ」とて、よめりける歌、青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かもとぞよめりける。⑬かの国人、聞き知るまじく、思ほえたれども、言の心を、男文字にさまを書き出だして、ここのことば伝へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。⑭唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じことにならむ。⑮さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人のよめる歌、みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

⑨文から⑬文まで文末に連続して「けり」が五回、用いられている。これは、最初の⑨文に「昔」とあることから明らかなように、阿倍仲麻呂にまつわる故事を記す部分であり、船旅の現時点のことではなく、遠い過去のことである。それらを「けり」文末によって過去の出来事として示すのは順当な用法といえよう。とはいえ、それだけのことならば、当該の五文すべての文末に「けり」を用いる必要があるまい。これらの「けり」がいずれも強調の係り結びの結びになっている点も考えると、単に時制を示すためのみとは考えがたい。

それに対して、⑦文は船旅の現時点のことであり、直前の⑥文の「寝ず」、直後の⑧文の「出で来る」という文末と並べれば、⑦文のみが過去のこととは考えられない。③文の「憂え嘆く」、④文の「苦しく心もとなければ」、⑤文の「いとわびし」などのマイナスの感情表現をふまえれば、そのような感情を紛らわせてくれる出来事として⑦文以下が記されたのであろう。

古典文法において、助動詞「けり」には、過去と詠嘆という二つの意味があるとされ、文末において、過去は地の文、詠嘆は和歌あるいは会話文の用法とされる。件の⑦文の文末「けり」が過去の意ではないとすれば、詠嘆ということになるが、⑦文は地の文であるから、例外となってしまう。

「けり」という語自体の意味としての、この二分法に異議を呈した、大木一夫『文論序説』（ひつじ書房、二〇一七年）は、文の意味として、従来の「過去」は事態伝達、「詠嘆」は事態認識に相当し、文末の「けり」はそれぞれの目的を果たす役割に関わることを示している。事態伝達文というのは、「話者のもっている知識・情報を聞き手に伝達する文」のことであり、事態認識文というのは、「その文を発することで認識を新たにする文、認識を新たにしたことであらわす文、あるいは認識をした内容を言語で象る文、つまり新しい認識に即応する文」（一一八頁）のことである。

このような文の目的あるいは機能による区別は、傾向差はあるとしても、文そのものの位相的な性格の違いに直接は関わらないとすれば、「けり」文末の事態認識文が地の文に現れてもおかしくないということになる。

⑦文に書かれてある、一月二〇日の月の出そのものは、その夜が晴れていれば、誰でも確認できることであるから、その事態を伝達することの意味はない。意味があるとすれば、その事態になんらかの新たな認識をしたことを示す場合である。その新たな認識とは、その月が「二十日の夜の月」であり、加えて「海の中よりぞ出で来る」月であったことから、阿倍仲麻呂の故事に思い至ったということに他ならない。

20

次に、冒頭文および末尾文の文末の「けり」を取り上げる。

その日の冒頭文の文末に「けり」が来るのは、次の一例である。

九日のつとめて、大湊より、奈半の泊を追はむとて、漕ぎ出でにけり。(二月九日)

同日の記事は二五文(地の文の述語文は二二文)から成り、他に文末に「けり」が来るのは、第三文と第六文の二例であり、他の文末は、動詞五例、形容詞二例、「けり」以外の助動詞一二例である。この日の末尾文は「かく行き暮らして、泊に到りて、翁人一人、専女一人、あるが中に心地悪しみして、ものものし給ばで、ひそまりぬ。」と助動詞「ぬ」で終わっている。第三文と第六文は次のとおりである。

③この人々ぞ、志ある人なりける。(二月九日)

⑥これを見送らむとてぞ、この人どもは追ひ来ける。(一月九日)

ともに、日記の現時点であつて、これらだけが他文と異なる過去ではない。二文とも同一の人物達に関わる内容であり、③文直後に「この人々の深き志はこの海にも劣らざるべし。」という一文があることから明らかなように、それらの人々に対する情意、言い換えれば、それらの人々の誠意に対する新たな認識が示されたものである。

件んの文末「けり」には「漕ぎ出づ」が上接しているが、同じ動詞が冒頭文末に来る一例が二月二十七日の条に、次のように見られる。

二十七日。大津より浦戸を指して漕ぎ出づ。(二月二十七日)

一月九日の冒頭文と比べ、表現パターンはほぼ同一であり、異なるのは文末の「(に)けり」の有無のみと云つてよい。この有無の違いの要因として考えられるのは、焦燥感や安心感の程度の違いである。

一月九日のほうは、前年の一月二十九日から、悪天候などのせいで、長く足止めを食らっていた末のやつとの出港であるのに対して、一月二十七日のほうは、同月二一日の門出から一週間を経過してはいるが、送別の宴などによるのであつて、事情が大きく異なる。

もう一つ考えられるのは、出港にどれほどの重きを置くかである。一月九日のほうは、完了系の助動詞「ぬ」も付加され、出港という行為そのものの完了に重きがある。それは、同日の後続文に「今は漕ぎ離れて行く」「漕ぎ行く

まにまに」(二例)「行き過ぐ」などの出港後の途中経過を示す表現が用いられていることから、逆に裏付けられる。対するに、一二月二七日のほうの「漕ぎ出づ」は、船旅の開始を包括的に示すものであって、実際に乗船するのは、同日の全一三文の第八文の「略」早く往なむとて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」とさわげば、船に乗りなむとす。」からであり、その後の経過もいっさい示されることなく、第二二文で「今宵、浦戸に泊る。」と、いきなり到着を示すのみである。

末尾文の文末に「けり」が来る六文は、以下のとおりである。

呼ばれて到りて、日一日、夜一夜、とかく遊ぶやうにて明けにけり。(二月二五日)

とかくいひて、前の守、今のも、もろともに降りて、今の主も、前のも、手取り交して、酔ひ言にこころよげなる言して、出でにけり。(二月二六日)

さて、船に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりけり。(二月一六日)

楫取の心は、神の御心なりけり。(二月五日)

これが中に、心地悩む船君、いたくめでて、「船酔ひし給べりし御顔には、似ずもあるかな」と、いひける。(二月六日)

「淡路の御の歌に劣れり。ねたき。いはざらましものを」と、悔しがるうちに、夜になりて寝にけり。(二月七日)

これらのうち、末尾文の文末にのみ「けり」が現れるのが、三日(二月二五日・一月一六日・二月六日)、末尾文以外にも見られるのが、三日(二月二六日(二例)・二月五日・二月七日)である。

この六文において、内容的に異質なのが、一月一日と二月五日である。ともに、その日の出来事の記述とはレベルを異にする書き手のコメントになっている。とくに、一月六日の末尾文は、「さて」という語から始まるように、その日の出来事とは直接の関わりがない、船旅の開始日から当日までの日数を、ただ事実として示したのではなく、相応の感慨とともに表したと考えられる。書き手のコメントとは、言うまでもなく、記述時点に行われるものであるから、文末の「けり」によって過去性が表示されるということではない。

残りの四文のうち、一月二五日の「明けにけり」、一月二六日の「出でにけり」、二月七日の「寝にけり」という文末表現は、それぞれの日の最後の出来事（行為）を示し、二月六日の「いひける」という文末表現は、その日に記された、ほとんど唯一のエピソードに対する行為を示している。どの文も、その文の出来事（行為）のみが過去であるわけではなく、またその内容からして、一日の出来事を統括しているというわけでもなく、それぞれの出来事（行為）自体に関する情意が込められていると見られる。

21

判断に関わる打消系の助動詞四三例はすべて「ず」（終止形のみ）である。その上接語はほとんどが動詞（他に形容詞一例、助動詞二例）である。

そもそもなぜ打ち消し表現が用いられるかといえば、特定の行為や状態を想定したうえで、それが成立していないことを表し伝えるためである。当面の対象とする行為や状態をそのまま表す語がないという場合もなくはないが、打消し表現にとって重要なのは、想定された行為や状態であり、その不成立という事実である。

土左日記の地の文の文末の「ず」に上接する動詞で、複数回出てくるのは、次のとおりである。

いだす(六)、見ゆ(四)、あり・止む(各三)、書く・立つ(各二)

たとえば、最多の「いださず」という文末を持つ六文は、すべて船に関してであり、「船をいだす」ことを想定したにもかかわらず、それが実現していないという事実を伝える。同様に、「見えず」の四文は、「海のありやう・西東・風波とところどころ」が見えることを望んでいるにもかかわらず、それができないという状況を、「やまず」の三文は、「風・雨・雨風」の止むこと(それによって出港できる)を願っているにもかかわらず、風雨があるという状況に変化がないことを、逆に、「たたず」の二文は、「波風・風波」が立つことを恐れているが、それがまだそれが生じていない事態を、それぞれ表している。

なお、「あり」については、「褒むるにしもあらず」(二月三日)、「やむべくもあらず」(一月一六日)、「いふともあらず」(二月五日)のように、実質的にはその全体で「褒む・やむ・いふ」を打ち消す機能を果たしていて、「あり」という存在の打消しを示すものではない。

これらの中で注目されるのは、「いださず」の六例中の五例、「やまず」の三例中の二例が冒頭の日付直後の文に見られることであり、その出港に関わる想定・関心の強さがうかがえる。同じ位置にある同様の例としては、各一回の「上らず・吹かず・降らず」も挙げられる。反対に、動詞文末のほうでも、「いだす」と「上る」が各一回、「降る」が三回、冒頭に見られる。

同じく判断に関わる断定系の助動詞一八例はすべて「なり」(二例が連体形)である。その上接語の半分は名詞で、「所」(四回)、「言・言葉・泊・名・わざ」(各一回)が見られる。残りは、動詞あるいは動詞+助動詞であり、重複する上

接語は見られない。

これらの分布位置で目を引くのは、冒頭に六例あることである。その最初の一例が、序に相当する、著名な日記冒頭文「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」である。新全集が、「男も書く」と聞いている日記というものを、女であるわたしも試みてみようと思つて書くのである。」と口語訳するように、「なり」は現代語の「のだ」に相当する、現事態の背景説明する機能を担う。この場合の背景は「女もしてみむとて」である。もう一例、「二十五日。守の館より、呼びに文持て来たなり。」（一二月二五日）も、続く一文から、それが送別の宴の誘いであるという背景の事実が示されている。

残り四例はどれも、次のように、名詞＋「なり」の文末である。

元日。なほ同じ泊なり。（一月一日）

三日。同じところなり。（一月三日）

八日。さほることありて、なほ同じところなり。（一月八日）

二十四日。昨日の同じところなり。（二月二四日）

これらはまったく同じ状況を示し、次に示す動詞「あり」の文末と同一である。

五日。風波やまねば、なほ同じところあり。（一月五日）

七日になりぬ。同じ港にあり。（一月七日）

十八日。なほ、同じところにあり。(二月一八日)

最後に、推量系とした助動詞の文末表現を取り上げる。

この助動詞文末全体で指摘できることが二つある。一つは、これらが見られるのは五五日のうちの一三日つまり全日の四分の一以下であり、複数見られるのは五日にすぎないことである。もう一つは、一例を除き、各日の冒頭には現れないことである。その一例は、「六日。昨日のごとし。」(一月六日)であり、同日の記事はこれのみで、文末の「ごとし」は例示の用法である。

以下では、大半を占めている「べし」(二五回)と「む」(八回)の文末表現を見てみる。

文末の「べし」に上接するのは、動詞が四例(言ふ(二)・あり・なる)、形容詞が二例(なし・読み据え難し)、助動詞が九例(なり「断定」(三)・つ(二)・ぬ(二)・ず(二))であり、助動詞連続が全体の六割を占める。

「べし」文末の文において目立つのは、一五文のうちの一〇文が和歌あるいは漢詩を話題にしていることである。その例を示す。

- ① こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。(二月二六日)「和歌」
- ② いと大声なるべし。(一月七日)「和歌」
- ③ 男どちは、心やりにやあらむ、漢詩などいふべし。(二月一八日)「漢詩」
- ④ 書けりとも、え読み据え難かるべし。(二月一八日)「和歌」

- ⑤ 聞く人の思へるやう、「なぞ、ただ言なる」と、ひそかにいふべし。(二月一日)「和歌」
- ⑥ 女子のためには、親、幼くなりぬべし。(二月四日)「和歌」
- ⑦ (略) またも恋ふる力にせむ、となるべし。(二月五日)「和歌」
- ⑧ これは病をすればよめるなるべし。(二月七日)「和歌」
- ⑨ この歌は、みやこ近くになりぬる喜びに堪へずして、いへるなるべし。(二月七日)「和歌」
- ⑩ かうやうのことも、歌も、好むとてあるにもあらざるべし。(二月九日)「漢詩・和歌」

①④⑤⑥は和歌の出来、⑦⑧⑨は和歌の解釈、③は漢詩を吟じる理由、⑩は漢詩あるいは和歌を詠む理由、②は和歌の詠み声、に関する書き手の評価あるいは思考が示されている。

土左日記には、全五五日のうちの約半分の二五日に、六一首(うち二首は船唄)もの歌が引用されている(漢詩は「漢詩はこれにえ書かず」(二月二六日)とあるように、実例は引かれていない)。もとより、和歌のみが引用されているわけではなく、その前後には、詠むことにまつわる状況が記され、その中には和歌そのものについてのコメントも見られる。そのコメントには、すでに取り上げた助詞文末の「いとをかしかし」(一月七日)や「かくは言ふものか」(二月七日)、「あらずかし」(二月五日)、形容詞・形容動詞文末の「似つかはし」(二月二五日・二月二二日)や「あはれなる」(二月二一日)など、直接情意的なコメントを表す表現もある。そのような中であって、なぜ文末に推量系の「べし」が用いられているのか。

推量系の助動詞の中でも「べし」は、当為性の強い推量を表す。つまり、出来事に対する判断として、推量ではあるものの確信性が強いということである。逆に、確信性が強いにもかかわらず推量であることが、一種の臚化表現と

しての効果をもたらすことにもなる。これに照らせば、上記の例では、前者には和歌の解釈や漢詩を吟じる理由、漢詩あるいは和歌を詠む理由、後者には和歌の出来や和歌の詠み声に関するコメントの文がそれぞれ相当しよう。

推量系の助動詞「む」の文末八例については、特徴的な点が三つある。

第一に、一例を除き、疑問文であるという点である。係助詞「や」と呼応するのが三例、副詞「いかが」三例、形容動詞「いかなり」一例である。

第二に、五例が、「べし」文末と同様に、和歌がらみの内容の文に用いられているということである。次のとおりである。

持て来たる物よりは、歌はいかがあらむ。(一月七日)

今日だにいひがたし。まして後にはいかならむ。(一月一八日)

海にて、「子の日」の歌にては、いかがあらむ。(一月二九日)

父もこれを聞きて、いかがあらむ。(二月九日)

唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じことによあらむ。(一月二〇日)

第三に、第一点に関する例外の一例は、日記末尾の、跋に相当する「とまれかうまれ、とく破てむ」(二月一六日)の「む」で、これのみが推量ではなく意志を表しているということである。

前稿の内容も含め、土左日記の地の文における文末表現について指摘してきたことの主要な点をまとめると、以下の五点になる。

第一に、各日の出来事に関して、時制には非関与的に表現される。それが端的に表れているのが、各日の冒頭文であり、動詞文末により、その日全体のメイントピックが包括的に示される。

第二に、過去の助動詞とされる「けり」の文末は、各日の出来事に関するかぎり、時制ではなく、各日の現時点における事態の認識を示す。そこには詠嘆につながる何らかの情意が込められている。

第三に、各日の出来事（行動）の個々は、それ自体を中心としてそのまま表現される。感情や感覚など、内面の変化に関わることも含め、動詞単独あるいは完了や断定、打消しなどの助動詞などの文末により客体的に示される。

第四に、書き手の情意が直接的な表現は、和歌などに関するコメントに集中する。それは、おもに終助詞や形容詞・形容動詞の文末、推量の助動詞の文末に認められる。

第五に、名詞文末とみなされる各日冒頭の日付はそれ単独では一文にならず、直後の表現と一体になって一文を成す。ただし、一方で日付は目印としての符号的な機能も担っている。

以上をとおし全体として言えることは、土左日記の文末表現は、基本的に日記というジャンルの文章の性格に基づいて行われているということである。

土左日記以前に、和文の日記、というより和文散文そのものが存在していなかったことを考えれば、散文とりわけ日記というジャンルの文章がどのようなものかを知るには、漢文以外にありえなかったであろう。それは中国漢文そ

のものだったかもしれないし、あるいは日本漢文か万葉集の和歌に付された漢文の序あるいは左注のようなものだったかもしれない。その限りで、土左日記の文章が漢文の影響を受けているというのは、むしろ当然のことである。ただし、それはあくまでも、文章・表現の枠組みを参照したにすぎない。

しかし、日記というジャンルを選択した以上は、その拘束から免れることはできなかった。たとえば、特筆すべきことが何もない日であっても、その日の日付と一文のみの記述を一日も欠かすことができなかった。物語ならば、あるいは後の女流日記ならば、ありえないことである。文末についても、物語の文章とは明らかに異質な表現を用いざるをえなかった。とくに物語には欠かせない時間経過に関わる時制には非関与的な表現になっている点である。

ただ、このような拘束が土左日記に不都合な結果をもたらしたわけではない。他に選択の余地がなかったという面もあろうが、逆に、日記という拘束があるからこそ与みしやすいというメリットもあったのではないかと想像される。土左日記は、日記との、いわば付かず離れずの関係をとおして、初めての和文散文を実現してみせたのである。